
流星の悪戯

入二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星の悪戯

【Nコード】

N3551I

【作者名】

入二

【あらすじ】

少年はちよくちよく不思議な出来事に巻き込まれる。元凶はひとりの先輩。いつものように突然呼び出された少年は、今日も今日とて先輩に振り回される。

朝という定義がいったいいつからいつまでを指すのかは個々人の考え方次第だが、少なくとも今は夜だと僕は思う。

「こんな時間に呼び出さないでください先輩」

不満たらたらずで、欠伸をかみ殺しながら、僕は呼び出した張本人を見た。

前を歩いていた先輩こと坂本ありす（さかもとありす）は懷中電灯を揺らしながら、どうしたの？ というふうに関だけをこちらに向けた。黒目がちな大きな目はやけに生氣に溢れていた。

「こんな時間で、今はもう朝だよ？」

なにいつてるのともいいいたげな、しかしきらきら輝く瞳になんだか毒気が抜かれた気がして溜息を吐いた。念の為時間を確認した。二時三十分。空には星が輝いている。真っ暗な山道に街灯なんてなく、先輩の姿がぎりぎり見えるくらいで、ぶっちゃけ僕は怖かった。だって、茂みがガサガサいつてるんだもん。

一般的にも応用的にも今は夜、しかも深夜に分類されると思うのだが、先輩には応用すら通用しないようだ。いったい基準は何なのだろう？

気を紛らわせるついでに訊いてみた。

「眠って、日をまたいで起きたら朝でしょ？」

だってさ。

先輩は毎日この時間帯に起きているらしい。いまさらになって僕は先輩のおかしさを実感した。

実際は三十分程だろうか、やけに長く感じたハイキングの終わりは、山の中腹にできた広場だった。

街を一望できるそこは昼間なら素晴らしく景色がいいのだろう。

真っ暗で、しかも深夜だから、見えるのは弱々しくて心細い街灯と信号機の光ぐらいだけ。雲が出てきて星も隠れてしまっているし。丸太を半分に割ったベンチに二人で腰掛けた。懐中電灯が消され、闇が一層深まった。しばらくしてから僕は訊いた。

「それで、いったい何をするんですか」

「もう……わかってるくせに」

恥じらうような声は聞こえたけれど、何も見えなかった。先輩がいるあたりで何か動く気配がした。

「どう、むらむらする？」

「いや何も見えないです」

ちっ、と舌打ちが聞こえた。意外に傷つくから舌打ちは止めて欲しいと思った。脳裏を過ぎった考えも振り払った。しょうがないさ、先輩は美人なんだもの、と自己肯定してなんとか平静を保った。

「まあ別に君が期待してるようなことはしないよ」

「期待も何もしてませんよ」

僕は即答した。あははと先輩が笑った。

「天体観測」

「え？」

「今日さ、流星群が見られるんだって。だから、天体観測しようって思って君を呼んだの。ドゥーユーАндダスタン？」

「……ああ、はい」

そう言えば、今日テレビで見た気がする。何でも深夜から明け方にかけての3から5時くらいがピークだとか何とか。

「……でもこの天気じゃどうしようもないですか」

所々切れ間はあるけれど、見える範囲全体に雲がかかってしまっている。どうやら今日は雨だという昨日の天気予報は当たりそうだ。ちっちっちっ、と先輩が言った。声に合わせて指を揺らす先輩の姿が頭に浮かんた。

「わかってないなー君。今まで何を見てきたんだい」
「そう言われても」

「私を誰だと思ってるの？」

自信満々な先輩の声に、僕は先輩のやらんとすることを理解した。
「……でも」

大丈夫なんですかという声は、先輩に遮られてしまった。

「まあ見てなさい」

そう言っただけ先輩は立ち上がった。闇に慣れた目に空に向けたらしい先輩の腕が見えた。ひとつ息を吸い込んだ先輩の体が微かに発光した。緩やかに風が先輩に向かって吹いた。僕は固唾を呑んで見守っていた。

「――」

先輩が何かを言ったが、僕は聞き取れなかった。ただ、変化は大きかった。

一瞬風が消えた後、突風が周囲を吹き抜けていく。それに合わせるように、空を覆っていた雲が吹き飛ばされていった。いや、あれは吹き飛ばされたんじゃない。文字通り消し飛ばされたんだ。

「……すご」

風がおさまってから空を見ると、雲は一片も残っていなかった。

まん丸なお月さまと満点の星が見えた。

「上出来上出来」

先輩が満足そうに言った。

今までもたいがい凄かったけれど、今回は特にだ。ぶっちゃけかなり引いてしまうくらいに。

突然先輩が小さく声を上げた。流星の大群が空を流れ始めていた。なんだか胸が揺さぶられる、すごく綺麗な光景だった。

「たーまやー」

場違いなかけ声に僕はちょっと笑った。あれだけ凄い力を持っていたのも憎めない先輩の天然っぷりがおかしかった。

僕達は次の日も学校だということを忘れて、流星群が途絶えるまで飽かずその光景を眺め続けた。

その日の地方紙に、
『突然の快晴、流星の悪戯か？』という小さな記事が載せられた。

(後書き)

……初投稿です。どうも入二と申します。これを読んでしかあ
とがきまで読んでくださる方がいるのかどうか。

小説家になろうは初投稿ですが、他の小さなサイトではちよくち
よく書いてました。まあ自分で言うのもなんですが、まだまだだ
な
あと思うくらいの筆力です。

いつか小説家になりたいなあと思ってます。

ここまで読んでくださった方には感謝を。では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3551i/>

流星の悪戯

2011年1月20日15時05分発行